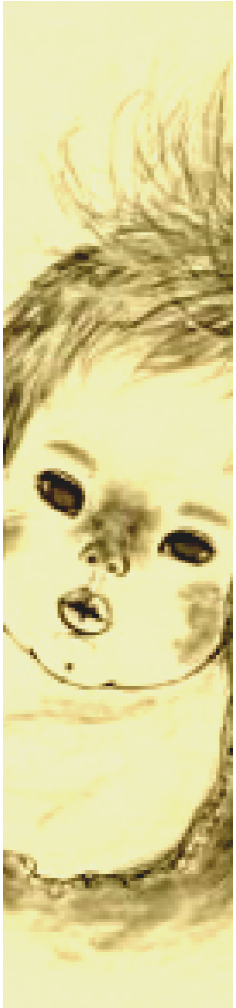
「大人になれなかった弟たちに……」

八組　読んだ読んだ　第一場面



・お腹がすいてもう限界な「僕」は、弟の大切なミルクを飲んでしまった。「僕」は、弟のミルクは飲んではいけないと分かっていたのに、何回も飲んでしまった。その「僕」は悪かったと思っている。　山下桃加

・たまらない空腹に襲われた「僕」は、かわいくて仕方がない弟の大切な大切なミルクを、どんなに悪いことか分かっていたのに飲んでしまった。　田中裕瑛

・お腹がすいて死にそうになった「僕」は、かわいくて、飲むものがミルクしかない、まだ赤ちゃんの弟のヒロユキのミルクを勝手に、悪いことだと分かっていながら飲んでしまった。　山田祐聖

・空腹に耐えきれなかった「僕」は、かわいいかわいい弟の大切なミルクを飲んでしまった。ミルクが弟の唯一の食べ物だと分かっていたのに飲んでしまったため、飲むたびに罪悪感を感じていた。　青谷有梨

・「僕」は自分が我慢しようとしていたのに、ミルクの缶を目の前にすると、大好きな弟のミルクだと分かっていても、いつの間にかミルクを飲んでしまった。そして後になって後悔をする羽目になった。　足立彩音

・「僕」は、飲んではいけないと分かっていたにもかかわらず、かわいくてしかたなかった弟の大切な大切なミルクを、「飲みたい」という欲に負けて飲んでしまった。その後、弟が栄養失調で死んでしまったときに、初めて本当の罪悪感に包まれ、後悔した。　梅田旬太郎

・弟の大切なミルクなのに、「僕」は飲んでしまった。かわいい弟なのにそこまでしなきゃいけない、とても悲しい時代なんだと思いました。　渡邉桃香

・食いしん坊な「僕」は、ミルクしか飲むことができない弟の大切なミルクを、罪悪感はたくさんあったのに、自分のことだけを考えて飲んでしまった。　安田江里奈

・「僕」は食べ物がなくて、弟のミルクが目について、悪いと思いながらも飲んでしまった。飲んでしまった後には、罪悪感だけが残った。　横山あさ美